

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Deictic verbs and the dialogic space : contrastive analysis of English, Japanese, and the Kyushu dialect of Japanese

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2002-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山口, 治彦, Yamaguchi, Haruhiko メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/875

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



直示動詞と対話空間： 英語、日本語、そして九州方言をもとに¹

山口 治彦

1. はじめに

“I’m coming”（「今、行くよ」）と言うべきところを“I’m going”と言
いそうになってしまった、いや実際にそう言ってしまった経験は、日本語を
母国語とする学習者に多いのではないだろうか。空間移動を表す直示動詞
（deictic verbs）、*come*と*go*の用法は、日本語の「来る」と「行く」の用
法に似ているため、つい、*come*と「来る」、*go*と「行く」をそれぞれ等価
物と見なしがちである。そして、日本語の「行く」と「来る」の使い分けを
もとにして英語の*come*と*go*との使い分けをおこなうと、先のような間違
いが生まれる。

学習者が犯すこのような間違いはよく目にする類のもので、さして重要な
ものではないかもしれない。しかし、この種の誤解は英語学習者の会話レベ
ルに留まるわけではない。研究者の論文や英和辞典の記述に、これと同根の
誤りが違ったかたちを取って現れることもある。問題はけっこう根深い。

たしかに、話し手が聞き手のところに移動するのにも*come*を用いるのは、
日本語を基準とした場合やはり奇異に映る。しかし、さまざまな言語に共通

1 小稿の端緒は、本学の卒業生長谷川（小川）紫穂さんとの卒業研究セッションにさかのぼる。夏休みも過ぎたある日、それまでのテーマに行き詰まって困り果ててしまった彼女に対し、私が暖めていた題材、つまり、直示的移動動詞について日・英・九州方言間の三者比較を示唆したことが、そのはじまりである。小川さんとのセッションを通して得たことも多い。本稿にとつて重要な陣内論文の存在を私に知らせてくれたのも彼女である。ここに記して感謝したい。

して見られる人称上の対立をもとに考えれば、日英の直示動詞のあいだに見られる違いは起こるべくして起こった類のもので、何ら不思議なものではない。そして、九州方言に見られる「来る」の用法も考慮に入れるなら、直示的移動動詞のふるまいに対しさらに一貫した構図を描くことができるだろう。九州方言の「来る」は、英語の *come* と日本語標準語の「来る」とを結ぶ掛け橋となるからである。日本語標準語、九州方言、そして英語における直示的移動動詞のふるまいの違いは、つまるところ、聞き手をどのように直示的対立軸に組み込むかによって説明できる。そのあたりの事情を本稿では対話空間という概念を導入して説明したい。

以下、日本語標準語の「行く」と「来る」、英語の *come* と *go*、そして、九州方言の「行く」と「来る」という順で述べていくことにする。

2. 標準語における「行く」と「来る」

「来る」は話し手の領域外から領域内への移動を表し、「行く」は逆に話し手の領域内からその外部への移動を表す、というのが大方の見方だろう。1人称の領域かそうでないのかという基準が直示動詞の使い分けにかかわっている。しかし、このような見方では、話し手の位置取りとは関係ない、中立的な移動を表す「行く」((1a)を参照)が網の目からこぼれる。そこで、「行く」は話し手から離れる移動、もしくは中立的な移動を表す、と定義すれば、「行く」の中心的意義が複数あることになってしまう。このような二者択一的な定義を避けるためには、「行く」は「来る」が表す以外の移動を表現する、とせねばならない²。「行く」と「来る」とを A 対 B といった対立関係とはせず、A 対 non-A の対立としてとらえるのである。

この A 対 non-A の対立は、直示的な移動動詞「行く」と「来る」にとっ

2 「到着点が話し手の領域外にある移動」というような定義も可能である。しかし、このようなとらえ方では、出発点に着目する傾向が強い「行く」と到着点を志向する「来る」との対立関係がじゅうぶんには記述できない。

て理にかなった対立である。なぜなら、空間上のありとあらゆる動きをこの「行く」と「来る」のたったふたつの動詞で言い尽くさねばならないからである。A 対 B という対立の構図では、young と old の対立のように、どちらともつかないグレーゾーンが必ずできる。となると、「行く」なのか「来る」なのか、はっきりしない。これに対して、A 対 non-A の構図ではそのような中途半端な領域が存在しない。「来る」でないのなら「行く」である、というふうに定めてあれば、どのような空間移動であってもこのふたつの動詞でこと足りるのである。

したがって、2 項対立（の組み合わせ）によって世界を切り分けなければならない場合には、「行く／来る」のように A 対 non-A の対立を用いることが多い。英語の *this/that* はその典型例である。*that* は non-*this*, つまり、1 人称の領域外にあるものを指すことになる。さらに、A 対 non-A の対立は非＝直示的な対立関係にも見られる。たとえば、英語名詞の可算用法 (countable use) と不可算用法 (uncountable use) も同様の対立を構成しているようだ。不定冠詞が付された “a (an) + N” の構造（もしくは、その複数形 “N’s” の構造）は、「来る」のように有標の (marked) 選択肢であり、裸のまま名詞が提示される不可算用法（正しくは、非＝可算用法 (non-countable use) とあるべき）は、「行く」のように、有標の構造が指し示す以外の領域を指示することになる。当然のことながら、本来 non-A であるものを A とは別個に定義しようとする、先に見た「行く」の二者択一的定義のように不都合なことが起きやすい。

A 対 non-A の対立がもたらすもうひとつの帰結は、A に対する性格づけと non-A の性格づけとが異なる場合がある、ということである。「来る」は話し手の領域への移動を表すため、必ず直示的な性格を有する。他方、「行く」は必ずしも話し手とは結びつけられなくてもよいため、直示的でない用法が可能になる（なお、Wilkins and Hill, 1995 を参照）。

- (1) a. エラーの間に走者は2塁から3塁へ行った
b. エラーの間に走者は2塁から3塁へ来た。

(1)の「行った」は空間的な移動を表す中立的用法で、話し手の位置にかかわらず「行く」を用いることができる。この場合の「行く」は直示的ではない。しかし、「来る」は違う。「来る」は常に直示的である。たとえば、(1a)は野球のゲームというコンテキストのなかで走者が進塁したことを指すのに対して、(1b)はゲームの構成要素としての選手の動きに言及しているのではない。3塁に近い位置（たとえば3塁側スタンド）から、ゲーム内容から離れて漠然と選手の動きを眺めている話し手（もしくは、3塁ベースのあたりを注視していた話し手）を想定する必要がある。

このように、「来る」と「行く」の使い分けは、A対non-Aの対立によってなされている。それゆえ、空間上のあらゆる動きに対しこのふたつの動詞で無理なく対応できるのである。くわえて、「行く」に直示的でない中立用法が存在するのに対し、「来る」は常に直示的であるのも、このふたつの動詞の使い分けがA対non-Aの対立によっているからである。

3. *come* と *go* と対話空間

次に英語の直示動詞のふるまいについて考えてみよう。日本語と比較した場合もっとも問題となるのは、「はじめに」でもふれたように、話し手が聞き手のもとに移動する場合である。

(2) Mother : Dinner's ready.

Daughter : Yeah, I'm coming.

もちろん、(2)の娘のせりふは、日本語では「うん、今、行く」とでもなるべきもので、*come*なのに「行く」という語が当てられる。

手元の英和辞典には次のような記載がある。

- (3) 1 来る, (こちらへ) やってくる
- 2 (相手のいるほうへ) 行く, 伺う, 参上する。(語法: 相手の立場に立って「相手から見て‘来る’」という感じにするのが英語の慣用; I'm going now. は「もう帰ります」など別の意味になる)。

(『新グローバル英和辞典 (第2版)』)

非常に丁寧な記述であると思う。しかし、この記述には問題がある。

まず、*come* の基本的な空間用法を複数認めることになってしまう。つまり、この記述にそのまましたがえば、「来る」と「(相手のいるほうへ) 行く」とのふたつの意味を *come* の空間用法として認めることになるのである。もともと、英和辞典には、バイリンガル辞書の使命として言語間の差異を際立たせる必要がある。したがって、このようなかたちで *come* の語義をふたつに分割することに理由がないわけではない。だとすれば、語義を分割したことをあげつらうのはこの辞書の執筆者に対しフェアではないかもしれない。

では、語法欄の記述に問題はないだろうか。「I'm going now. は「もう帰ります」など別の意味になる」とあるところは、学習者に有益な情報を与えてくれる。しかし、はたして、英語の話者は (2) のようなコンテキストにおいて「相手の立場に立って」発言しているのだろうか。いささか怪しい説明だと言わざるをえない。

上の説明は日本語の「来る」を前提としている。まず「来る」の用法が先にあり、*come* がそこから逸脱する部分を記述する、という手法である。標準語の「来る」には、話し手による聞き手のもとへの移動を表す用法はない。そこで、「来る」の論理でなんとか *come* のこの用法を説明するため、「相手の立場に立って「相手から見て‘来る’」」というふうに、「来る」の適用範囲を例外的に広げるような説明方法をとったのであろう。ある言語を記述す

る際に別の言語の論理を前提にするのは、言語間の違いを引き出すうえでは便利な手法であるが、やはり問題になることもある。

このような態度は、英和辞典という特殊な環境においてのみに見られるのではない。次の一節を例にとって考えてみよう。(4)は“I'm coming”という発言においてなぜ *come* が用いられるのかを説明している。

- (4) このような場合の *come* と *go* の使い分けの基準は、識者には周知のことだが、「感情焦点」(Empathy Focus) にあって、話し手が、自分と呼んでいる聞き手への返事として答えているのだから、話し手は聞き手に感情焦点を置き、ここへ「近づく」のだから *come* が用いられる、といった具合に、文法は、なぜ「行く」が *come* なるのかの理由を理路整然と明らかにしてくれた。(浅田, 1987: 37)

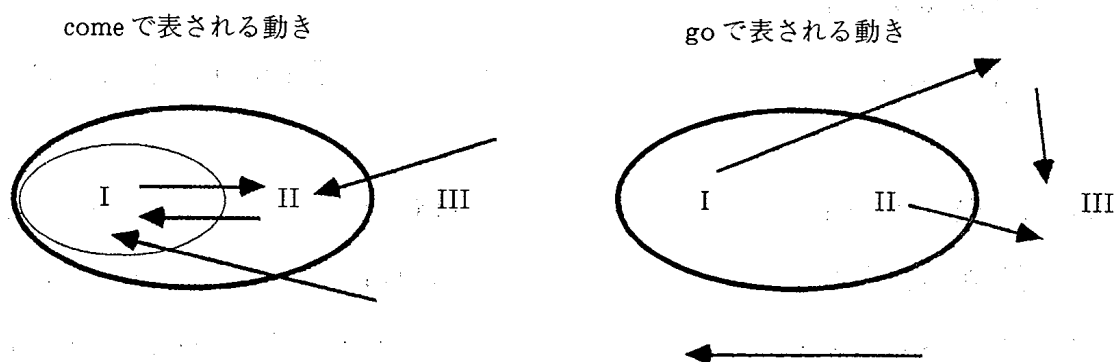
上の説明に対し、いくつかの問題が考えられる。まず、「自分と呼んでいる聞き手への返事として答えている」とあるが、(2)のような状況——母が“Dinner's ready”と言い、娘が“I'm coming”と答えるような状況——を上での説明は想定している。しかし、そのような場面でなくとも、聞き手が到着点である動きには *come* をふつうに用いることができる。とすれば、聞き手が到着点である移動に関して、話し手は常に聞き手に「感情焦点」を置くことになる。では、なぜ話し手が移動に関与する場合であっても聞き手に「感情焦点」が置かれるのか。共感という概念を用いるのなら、もっとも共感度が高いはずの話し手自身を顧みず、なぜ聞き手への共感を常に優先するのか。その理由を明確にしないかぎり、(4)のような説明を受け入れることはできない。

次に、このような説明の根底には、話し手が聞き手のもとに向かう動きを *come* で表すことに対する違和感があるように思う。話し手に向かう動きに *come* を使うことは理解できる。なぜなら、話し手は主観の中心であるから

である。しかし、その中心が聞き手のもとに移動するのに *come* を用いるのは合点がいかない。そのため、聞き手に「感情焦点」なるものを一時的に置く、というのが、このような説明に見え隠れする論理である。

では、なぜ話し手が聞き手のもとに向かう移動を *come* ということに違和感を感じるのか。それは「来る」の論理を通して *come* を見ているからである。(少なくとも *come* は、「来る」と同様、話者の主観を中心とする直示動詞であるはずだ、と想定していることは確かである。) この点で (4) の説明は (3) の語法解説と基本的に同じ見方を共有している³。

come について考えるのなら、*come* の用法から考察をはじめべきで、「来る」の用法はひとまず置いておくべきである。では、*come* はどのような移動を表しうるのか。図一1は *come* と *go* が表す基本的な動きの概略を表したものである。本稿の眼目は、英語、日本語標準語、そして九州方言における直示動詞の用法を比較することによって、ことばの使用にかかわる人



図一1 come と go が表す移動

3 このような見方は、ほかの論者にも見受けられる。たとえば、直示動詞に関して先駆的な研究をおこなった大江は、話し手の聞き手への移動を表す用法について次のように述べている。

聞き手——結局は聞き手の視点をとる話し手——が聞き手のホームベースに位置し、ある動きをその場所（到達点）への動きとして締め、描く。（大江，1975：45）

もっとも、大江は「英語では話し手と聞き手を同一伝達行為への参加者として不可分離のものとして捉える傾向が強いのに、日本語では二者を分離して捉える」（45）とも述べている。この発言は、日本語は「1人称」対「非=1人称」の対立を用い、英語は「1・2人称」対「非=1・2人称」の対立を利用する、という本稿の考えと矛盾しない。

称的対立の可能性を示すことにある。したがって、補文中の直示動詞のふるまいのようにやや特殊な用法は、考慮の対象外としている。

図—1 から *come* と *go* がどのような空間移動を表すのかを単純に求めるのなら、

- (5) *come* は「あなたと私が共有する空間」に到着点がある動きを表し、
go はそれ以外の動きを表す

ということになるだろう (小森, 1997)⁴。もっとも、(5) の定義には若干の補足が必要である。

まず、(5) の定義は到着点にのみ言及し、出発点には注意を払っていない。それは、*come* が到着点に着目する動詞であるからである。Fillmore, 1997 は次のような例を用いて *come* の到着点志向を説明している。

- (6) a. He went home around midnight.
b. He came home around midnight. (Fillmore, 1997 : 80)

(6a) も (6b) も一定の行為が夜半におこなわれたことを示している。しかし、両者が伝える行為の種類には違いがある。(6b) は夜中に「彼」が帰宅したことを示しているのに対して、(6a) のほうは帰途についたのが夜中だったと言うだけで、実際に帰宅した時刻を示しているわけではない。この例からも分かるように、*come* は到着点を志向し、*go* は出発点を志向する度合いが強い (さらに Radden, 1995 : 427 を参照)。

次に、「あなたと私が共有する空間」について説明しよう。「あなたと私が

4 小森は次のように述べている :

移動する人 (話し手, 聞き手, 第三者いずれに関わらず) の移動先が, 話し手と聞き手で構成される発話の場面に関係すれば *come*, それ以外の場合は *go* である。(小森, 1997 : 59)

共有する空間」というと、なんだか七面倒くさい概念のように思えるが、実は人称に関してはあまりに当たり前の概念である。ここではそのような空間を対話空間 (dialogic space) と呼ぶことにする。たとえば、バンヴェニストは、1人称・2人称・3人称という人称区分は、3項が鼎立的に存在するのではなく、まず、対話の場に居合わせる1人称と2人称が対立し合い、そのうえで、1人称と2人称とが合わさって、その場にはいない3人称(非人称)と対立する、と述べた (Benveniste, 1961)。この対立を図示すると (7) のようになる。

(7) [I vs II] vs III

まさに、[I vs II] の部分が対話空間の存在を示している。

さらに、吉本は同様の概念を「会話空間」(conversational space)⁵ という用語によって導入している (Yoshimoto, 1986)。吉本は、日本語の指示詞「コレ/ソレ/アレ」を [コレ対ソレ] と [コレ対アレ] からなる二重の2項対立ととらえ (三上, 1955)、この二重の2項対立を説明するために、会話空間を以下のように設定している。

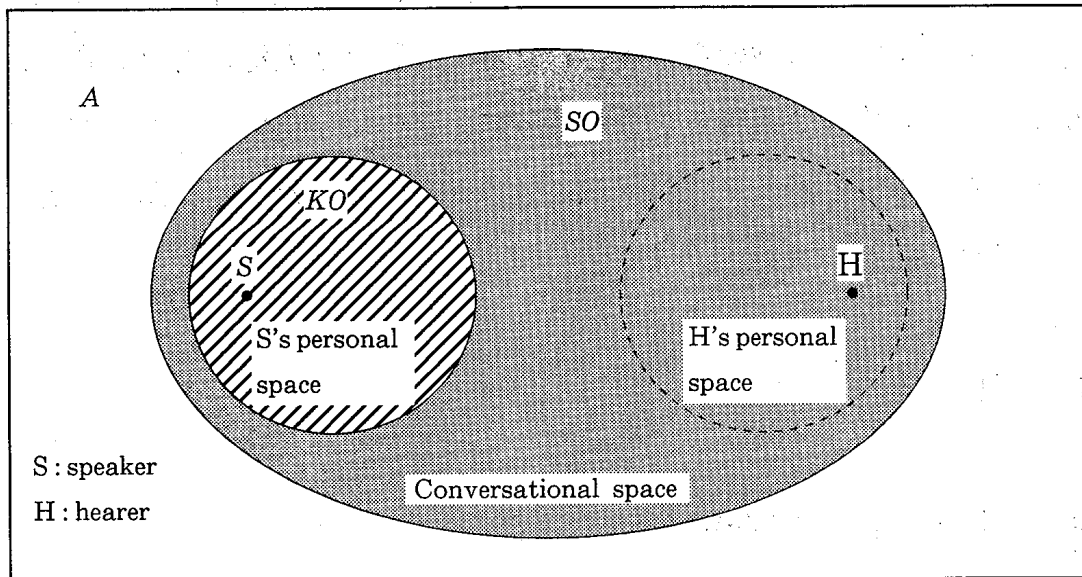
(8) Conversational space is the domain around the interlocutors, from which others are expected to maintain a distance so as not to overhear or interfere with the exchange.

(Yoshimoto, 1986 : 56)

彼の説によると、コレとソレは会話空間内における1人称と非=1人称との

5 私が「対話空間」という用語を用いるのは、「対話」のほうが「会話」よりも1人称と2人称との対立/連帯関係をうまくとらえていると考えるからである。また、対話という概念は、ほかのコンテキスト——たとえば、語り narrative——と対比させるのにも都合がよい。対話と語りとの対立に関しては、山口, 1998, 2000を参照されたい。

対立であり（ソレは non-コレ），さらに，コレは，対話の場にはない（遠方の）存在アレと [1・2 人称] 対 [非=1・2 人称] のかたちで対立する（アレも non-コレ）。このような関係を図示すると図—2 のようになる。



図—2 コレ/ソレ/アレと対話空間：Yoshimoto, 1986

1 人称から 2 人称への動きを表す *come* の用法は，たしかに日本語を母語とする者を戸惑わせることもあるが，その用法の基準となる概念（[1・2 人称] 対 [非=1・2 人称]）は日々常用されている日本語の指示詞のなかにも見いだせるのである。

さて，対話空間という術語を得て，(5) の定義は (9) のように書き換えることができる。

(9) *come* は対話空間内に到着点がある動きを表し，*go* はそれ以外の動きを表す。

(9) の定義は，日本語標準語の「来る」を基本に考えた場合，奇異に映るかもしれない。しかし，繰り返すが，*come* の意味について考えるとき，「来る」を基本にして *come* がどれだけ「来る」から逸脱するかについて考

える必要はない。私たちは(9)の定義を額面通りに受け止めればよいのだ。というのも、対話空間という概念は、先述のように人称に関する基本的な概念であるからである。たとえば、子どもは、自我の意識に目覚める前の段階では庇護者と自己とを明確には分離できていない、とよく言われる。自我形成のこの段階においてはまだ1人称と2人称は対立するに至らず、両者は渾然一体となったかたちで3人称と対立することになる。つまり、この段階においてすでに対話空間の原初形態は存在しているのである。

およそ人称の対立は[1人称]対[非=1人称](以降,[I vs non-I]とする)、および[1・2人称]対[非=1・2人称](以降,[I・II vs non-I・II])、のふたつの対立、もしくはその組み合わせによって構成されているようである(李, 2002, およびJakobson, 1942, Greenberg, 1993などを参照)。つまり、世界を人称という概念で切り分けるにあたって、分水嶺となるのは聞き手(2人称)を含めるか否か、という基準なのである。そして、日本語標準語は移動動詞を使い分けるにあたって、[I vs non-I]の基準を用い、指示詞を使い分けるにあたっては、[I vs non-I]に加え、聞き手の概念を採り入れた[I・II vs non-I・II]の対立も利用する。他方、英語は移動動詞の使い分けには[I・II vs non-I・II]の対立を、そして指示詞(this/that)の使い分けには[I vs non-I]のみを用いているのである⁶。

日英の直示的移動動詞の使い分けには、このように[I vs non-I]の対立と[I・II vs non-I・II]の対立とのふたつが関与している。そして、どちらの対立にも利点がある。まず、標準語の「行く/来る」の場合、常に一貫して自己を中心にして世界を眺めることができる。他方、英語のcome/goの場合、対話空間を基準に使い分けをおこなうため、話し手と聞き手とは同じ動詞を使うことが可能になる。つまり、話者の交替にともない動詞を変更す

6 青木, 1990は、直示表現のふるまいに関し興味深い仮説を立てている。ひとつの方言内で直示表現が用いる人称上の対立は同一であるとする見方である。この仮説によって、青木は方言間でずれが見られる「行く/来る」や「くれる/もらう」など、視点がかかわる動詞のふるまいを統一的に説明しようとした。しかし、指示詞が用いる人称的対立基準をも考慮に入れると、この仮説は成り立たない。

る必要がない。

(10) Sadayuki : Are you coming, too?

Hideki : Yes, I'm coming/ *going.

もちろん標準語の「行く／来る」の場合はそのかぎりではない。

(11) Norio : ヒロタンも来る？

Hiro-tan : うん, ヒロタンも行く／*来る。⁷

このように、言語が利用できる人称上の対立パターンは限定されており、どのパターンをどのように用いるかは、各言語（方言）に委ねられている。空間移動を2項対立によって表現しようとするなら、標準語型の [I vs non-I] の対立か、英語型の [I・II vs non-I・II] の2種類しか可能性がない。したがって、英語の *come/go* の使い分けと標準語の「行く／来る」の使い分けとの違いは、起こるべくして起こった類のもので、その違いには言語学上の確固とした根拠が見い出せるのである。

そして、九州方言の「来る」の用法は、この2種類の対立関係をさらに一貫した連続体としてとらえることを可能にしてくれる。次節では、九州方言に少しばかり耳を傾けてみよう。

4. 九州方言「来る」に見る人称対立

大分県をのぞく九州地方では、「行く／来る」の使い分けには標準語のそれとずれがあることがよく言われている。⁸

7. 子どもによる直示表現の修得にはさまざまな問題が考えられるが、話者が交替することによって視点を切り替えねばならないことも、その大きな要因となる、正高はこの点に関して興味深い論考を提供している（正高，1998，1999）。

8. 同種の用法は、九州地方以外に山陰、北陸、東北の一部にも存在するようである。山田は富山方言に関して詳しい報告をしている（山田，1999）。

- (12) 母：ご飯よ
 子：すぐ来るちゃ（すぐ行くよ） （大里，1983：40）
- (13) B：今カラコッチニ来ン？（来ない？）
 A：ウン，ジャスグ来ルケン（行くから） （陣内，1996：44）
- (14) A：ドコ行キョート？（どこに行ってるの）
 B：Cサンチヤケド
 A：一緒ニ来テヨカ？（行っていい？） （陣内，1996：44）

(12) と (13) は，九州方言において話し手が聞き手のもとに向かう移動にも「来る」が使えることを示している。(13) は電話での会話を想定している。(14) は，聞き手に同行する場合にも，「来る」が使われることを示している。いずれの場合にせよ，ここでの「来る」は，英語の *come* と同じふるまいを見せている。つまり，到着点が対話空間内にある動きに対して「来る」を用いているのである。付言すれば，(14) の場合，聞き手も移動しているのであるが，結局のところ，到着点が対話空間内にあることになる。

しかし，九州方言の「来る」が *come* とまったく同じようにふるまうわけではない。

- (15) A：来月の20日に俺の家で同窓会をやるんだけど，来れる？
 B：来月の20日？わかった。じゃあ，来月の20日，おまえのうちに行く／来るけん。

(15) のようなコンテキストでは，Bは「行く」「来る」のどちらでも使えるようである。英語話者であれば *come* を用いるような場面でも，九州方言の話者は聞き手との関係において状況をどう把握するかによって，「行く」

と「来る」を使い分けているようなのである。

陣内はこのような側面に着目し、九州方言話者に対して内省調査をおこなった（陣内, 1991, 1996）。先に見た電話の会話例（13）のようなコンテキストを示したうえで、どのような条件があると「来る」を使いやすいかを被験者に尋ねたのである。そして、（16）のような結果が得られた。

(16) 「来る」の方言用法話者の内省報告（A＝話し手, B＝聞き手）

- [1] Bの家が距離的に近く、到着するにもさほど時間を要しない
- [2] Aが自分の家を出るまでの時間が短い
- [3] AとBは親密な関係にあり、お互いに気配りなどする必要がない
- [4] AはBより年長であり、Bに対し気配りをする必要がない
- [5] AのBの家に行きたいという願望が強い
- [6] AのBの家に行かなければならないという必要度が高い
- [7] AのBの家に行くという意志が固い
- [8] BのAに来てほしいという期待が強い（とAがみなしている）
- [9] Bの所には複数の人間がおり、Aはそこに合流する状況である
- [10] AとBの会話は方言スタイルでなされている（陣内, 1996: 48）

（16）に挙げられた条件は、移動の距離、時間、話者間の社会関係、話者の心理状態、方言の使用、など多岐にわたっている。しかし、これらの条件はすべてが同じ方向を指している。1人称から2人称への移動を表現する際、聞き手との心理的な距離が近い場合に「来る」が用いられ、心理的な距離が遠くない場合には「行く」が用いられるのである。とは言うものの、話し手の意識が自分の主観を離れて、聞き手に感情移入をおこなえるほどに思い入れが強い、ということを表しているのではない。つまり、聞き手の存在を意識した人称上の対立——対話空間内か否か——が用いられるとき九州方言の「来る」は英語の *come* のようにふるまうのである。

私がおこなった小調査によってもそのことは裏付けられた。たとえば、先ほどの(12)や(13)とは違って当該の移動行為が時間的にずいぶん後になる場合、「来る」よりも「行く」のほうが好まれるようである。

(17) A : オレ, 来年の春に, 大牟田に焼き肉屋を出すったい。一度食べに来てくれん?

B : 来年の春? まだまだ先の話たい。いいよ。じゃあ, 開店のとき, 行くけん, また, そのとき電話して。

もちろん, 1人称から2人称への移動を表す「来る」の用法は, 問題の移動が時間的に差し迫っていることのみが条件となるわけではない。したがって, 先の電話の会話例(13)のような場合であっても, 「来る」だけが常に可能であるというわけではなく, 「行く」が用いられることもありえる。

(18) A : 今からこっちに来ん?

B : うん, じゃすぐ来る/行くけん。

「行く」を用いた場合, AとBの関係はあまり親しくない印象を与えるようである。というのも, 「行く」を用いた話し手は, 自らが聞き手と関与する場面内を移動するといった観点に留意しているのではなく, 自分がそのホームベースから離れるという側面に着目していることになるからである。このように, 当該の移動行為が時間的には差し迫っているような場合であっても, 聞き手が存在する到着点に着目するのか, 話し手がいる出発点に留意するのにかよって, 「来る」と「行く」との使い分けがおこなわれることもある。次の例はそのような使い分けをさらに明瞭にしてくれる。

(19) A : もうすぐそっちに, うちの息子が来よるけん, そしたらうちに電

話すること、言ってくれ。

(19) は、話し手の息子が目的地に着くのに先んじてその目的地に電話を入れた、という状況での発話である。この場合、移動は現に進行中であるし、到着する時間も間近にせまっている。したがって、「来る」が用いられる。このような場面で、もし、

(20) A : もうすぐそっちに、うちの息子が行くけん、

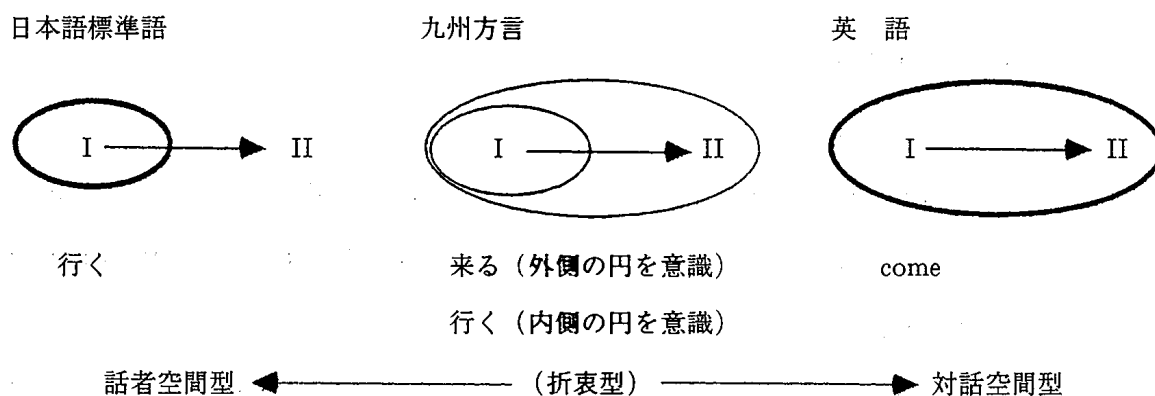
と言えば、息子はまだ家を出ていないことを意味する。移動行為がまだ開始されていないだけに「もうすぐ」によって時間が指定される行為は、到着点志向の「来る」ではなく、「行く」でしかありえない。単に時間的に近接しているからという理由だけで「来る」が使われているわけではない。

このように、九州方言における「来る」の用法は、対話空間を意識しているのか否かによって左右されている。話し手が明確に対話空間を意識しているときは、話し手から聞き手への移動であっても、同種の場面で英語が *come* を用いるように、九州方言は「来る」を用いることができる。そして、対話空間を意識しえない状況では、九州方言は標準語と同じように、話し手の領域から遠ざかることを示す「行く」を選択するのである。

5. *come* と「くる」が示す必然

本稿では、日本語標準語、英語、そして九州方言における直示動詞の使い分けについて論じてきた。これら三つにおける直示的移動動詞の使い分けの鍵を握るのは、聞き手の存在である。聞き手をどのように取り込むかに、この三者の違いがある。1人称が2人称のもとへ移動する動きについて言えば、日本語標準語は聞き手の存在を考慮せずに「行く」を用いる。他方、九州方言は対話空間を意識しうるときにのみ「来る」を用い、英語は対話空間内の

移動ととらえ *come* を用いる。人称と動きの関係を図示すると図—3 のようになる。この三者が、聞き手の取り込みに関して連続性を示すことが見て取れるだろう。



図—3 1人称から2人称への移動：標準語・九州方言・英語

3節で述べたように、直示動詞が利用しうる人称上の対立は、[I vs non-I] と [I・II vs non-I・II] のどちらか一方である。そして、日本語標準語は前者を採り、英語は後者を採った。ただ、それだけのことである。“I’m coming”のごとき例に対し、話し手が聞き手の視点をとっているといった説明がおこなわれるのは、英語の *come* も [I vs non-I] の対立を採用していると暗に決め込んでしまっているからにほかならない。日英の直示動詞のあいだに見られる違いは、2種類の人称的対立からひとつを選ばねばならないという必然に裏付けられており、何ら不思議なものではない。そして、九州方言の「来る」の用法は、この2種類の人称的対立が互いに疎であるのではなく、聞き手のとらえ方によって結びつけられる可能性を示している。

さらに、九州方言の「来る」は、対話空間という概念が絶対的なものではないことも示している。話し手が聞き手との関係をどのようにとらえるかが、九州方言の「行く／来る」の使い分けに影響しているからである。対話空間は本来、発話の場、つまり、話し手と聞き手との関係に根ざす概念である。したがって、話し手と聞き手との距離的・時間的・社会的・心理的隔たりが

大きくなり過ぎると拡張できなくなる。このことは、英語にとっても例外ではない。*come/go*の使い分けに際し、対話空間内に到着点がある移動を*come*に振り分ける英語も、当該の移動が距離的にも時間的にも現時点から大きく隔たってしまった場合、事実上、聞き手のもとへの移動と見なせる場合であっても、*go*を用いることがある⁹。

(21) A: I was just asked to chair a panel on deixis at the next conference. This one will be held in Paris next summer. I am really looking forward to it.

B: Oh, that's great. I'm really interested in the topic. So, I think I will come/go to the conference and attend your panel.

移動するときに来年の夏で、しかも行き先が距離的にも遠いパリとなると、聞き手が明日出席するパーティーに話し手が合流する場合のように *come* が常に使えるというわけではない。ここでの *come/go* の使い分けは、パリに行く際に聞き手に帯同するのか、それともひとりでパリに行ってその先で聞き手に合流するのかによってなされるようである。つまり、問題となった時間に到着点に聞き手が存在するものの、*go* が用いられることもあるのである。(21) の B の発話を少し変更すると、さらに *come* を用いにくくなるようである。

(22) A: I was just asked to chair a panel on deixis at the next conference. This one will be held in Paris next summer. I am really looking forward to it.

⁹ この観察は家入葉子（私的談話）に負うところが大きい。なお、(21) と (22) に関する判断は、立木ドナ、マーク・カンパナの教示によった。

B: Oh, that's great. I'm really interested in the topic. So, next summer, I think I will 'come/go to Paris and attend your panel.

(22) は、(21) よりも行き先と行く時期を強調したかたちにした。このようなコンテキストで *come* が用いられるのは、(22) の会話が電話でなされており、A が発話時においてパリにいる、と仮定した場合にかぎられるようである。

英語型の対話空間も絶対的なものではない。ある移動を叙述するのに、発話の場に根ざす対話空間を拡張して *come* を用いるのか、それとも対話空間外への移動として *go* を選択するのは、ひとえに話し手がどのように当該の移動を把握するかにかかっている。空間把握に聞き手をランドマークとして利用する以上、話し手と聞き手との関係をどうとらえるかが話し手の理解の仕方を左右せざるをえない。これもまた人称対立の必然なのである。

参考文献

- 青木晴夫. 1990. 話者基点方言と聴者基点方言：意味論的類型試論. 国広哲弥教授還暦退官記念論文集編集委員会（編）『文法と意味の間：国広哲弥教授還暦退官記念論文集』. くろしお出版. 1-13.
- 浅田壽男. 1987. 文法とは何か：come と go を中心に. 『語法研究と英語教育』9, 35-41.
- Benveniste, Emile. 1961. Relationships of person in the verb. *Problems in General Linguistics*. Tr. by Mary Elizabeth Meek. Coral Gables, Florida: University of Miami Press. 195-204.
- Fillmore, Charles J. 1997. *Lectures on Deixis*. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Greenberg, Joseph H. 1993. The second person is rightly so called. Eid, Mushira and Gregory Iverson (eds.) *Principles and Prediction: The Analysis of Natural Language: Papers in Honor of Gerald Sanders*. Amsterdam: John Benjamins. 9-23.
- Jakobson, Roman. 1942. The Paleosiberian languages. *American*

- Anthropologist* 44, 602-620.
- 小森道彦. 1997. 運動の「過程」または「結果」としての come と go. 『英語語法文法研究』4, 53-66.
- 久野暲. 1978. 『談話の文法』. 大修館書店.
- 陣内正敬. 1991. 「来る」の方言用法と待遇行動. 『国語学』167, 90-82 (15-23).
- . 1996. 『北部九州における方言新語研究』. 九州大学出版会.
- Levinson, Stephen. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lyons, John. 1977. *Semantics, Vols. 1 & 2*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 正高信男. 1998. コミュニケーション活動とジェスチャー再考: 「行く」と「来る」の適切な使用の習得過程から. 『日本語学』17 (臨時増刊号), 32-41.
- . 1999. 認知と言語. 桐谷滋 (編) 『ことばの獲得 (ことばと心の発達②)』ミネルヴァ書房.
- 三上章. 1955 (1972). 『現代語法新説』. くろしお出版.
- 大江三郎. 1975. 『日英語の比較研究: 主観性をめぐって』. 南雲堂.
- 小川紫穂. 1999. 私の世界, 二人の世界: 直示的な移動動詞にみられる人称関係の構造. (神戸市外国語大学卒業論文).
- 大里泰弘. 1983. 九州方言における「来ル」について. 『九大言語学研究室報告』4, 39-42.
- Radden, Günter. 1995. Motion metaphorized: The case of *coming* and *going*. Casad, Eugene H. (ed.) *Cognitive Linguistics in the Redwoods: The Expansion of a New Paradigm in Linguistics*. Berlin: Mouton de Gruyter. 423-458.
- 李長波. 2002. 『日本語指示体系の歴史』. 京都大学学術出版会.
- Willkins, David P. and Deborah Hill. 1995. When “go” means “come”: Questioning the basicness of basic motion verb. *Cognitive Linguistics* 6: 2/3, 209-259.
- 山田敏広. 1999. 富山方言における「行く」「来る」の用法について. 『富山国際大学紀要』9, 59-73.
- 山口治彦. 1998. 『語りのレトリック』. 海鳴社.
- . 2000. 「話法とコンテクスト: 自由直接話法をめぐって」 *JELS* 17 (日本英語学会第17回大会研究発表論文集), 261-270.
- Yoshimoto, Kei. 1986. “On demonstratives *ko/so/a* in Japanese.” 『言語研究』90, 48-72.